

Newsletter

MAY 2001

http://www.aack.or.jp

目次

紀行

極西北ネパール国境地帯に行く

新井 浩……………1

「西大巔」登山記 「下」

— 森本陸世君不慮の死前後 —

本多 勝一……………4

只見川袖沢御神楽沢

芝田 誠通……………6

随想

南極を夢見た頃

— 今西さんと園子夫人の思い出 —

北村 泰一……………7

会員情報

住所変更

小澤 康久……………14

追悼

一澤さんを悼む

……………14

お知らせ

理事会（三月一八日開催）報告

……………15

関係団体行事カレンダー

……………16

編集記

……………15

極西北ネパール国境地帯 を行く

新井 浩

大阪山の会は、ここ数年来西北ネパール国境地帯の山岳・峠を踏査しており（JAC山岳Vol.九四）、今年が最後の遠征となる由、急遽参加させてもらった。吉永定雄総隊長（D.スネルグローブ「ヒマラヤ巡礼」、N.クリンチ「ヒドンピーク」等の訳者）、大西保隊長ら一二名は、リエゾン、シェルパ、ポーターを従えカトマンズからネパールガンジ經由シミコットへ飛んだ。

一．緑の植生地帯

六月五日、シミコットよりキャラバン開始。雨の日が多い。マツ、モミの谷間で斧で大木から木材生産をしているのを見かけた。又こんな所にと驚く急斜面場所が黒々と拓かれていた。焼畑造成である。雨の谷間で大木を切り倒し焚火をする。寒さに震えた馬に酒を飲ませ焚火にあたらせる。人間の所作と自然破壊について考えるのであった。急流の谷間をつめると樺、石楠花の灌木地帯となり、空が広がる。シャクナゲの花き残りの花を過ぎると青いケシの花

が出現する。秘境に咲く「青いケシの花」の仲間で最大の高さ七〇〜八〇センチの「メコノプシス グランデイス」や、「ホリドウラ」。意外に多く見ることができた。一日にトゥンサに着く。四〇〇〇メートルの高度に達していた。南のはるかにサイパルが見え嬉しくなる。

人の良いシェルパコックに出会いけり

絵表示が誰にもわかるエアポートクルミの木巨木揃いに驚きぬ

イラクサを箸でしごいて鍋の中

岩壁を穿ちて険し巡礼道

山羊の群出合い頭の交差かな

傘差して焚火を囲む激流際

高度増し雨を抜け出し緑消ゆ

岩壁の裾野の砂地一等地

二．茶褐色の世界

トゥンサで三日間の高度順応化登攀を行い、一六日に最初の難関である雪のニアラ・ラ峠（四九〇〇メートル）を越える。いよいよチベット高原地帯に入る。モンスーンは、ここまで北上しないものの、一日の天気の変化は激しい。風、雨、雲、青空が忙しく去来し、一日の中に四季があるみたいだ。以後七月一日迄の三〇日間を四〇〇〇米以上の高度

で過ごす事になった。

シエルパから祈りの赤紐首に巻く
馬に乗り峠への道雪深し

峠越え斜面に目を引く花紫
目の下に蛇行の流れ北を指す
はるか北チベット高原薄き雪
朝霧が隣のテント包み込み
霧厚く雲表の国実感す

三. 最北の峠

ネパール最高の緯度に位置するラプチェ・ラ(五〇一八メートル)の踏査を行う。北へ抜ける峠の一つとして、たいていの地図には明記されている。我々の今年最初のニアル峠越えの後、追い抜いてラプチェ・ラへ向ったのは、行商のネパール人やチベット人達であった。

さて第一隊は、馬方の案内付きであったが、西隣りのラルング・ラへ、ラプチェ・ラと信じて到着した。(二二日)次にこの情報を得ながら第二隊(自分がいる)は、更に西寄りの峠に出てしまい失敗する。しかし、ラルング五三〇九メートルに登頂。カイラス・マナサロワール湖を望見し喜ぶ。(二七日)GPSを持つ第三隊は、国境標示柱のある間違いの無いラプチェ・ラに到達した。(七月一日)チベット側には遊牧の黒テントや、ヤクが沢山いた。

歩けども地形の変化乏しけり
野生馬駆けまわりたる別天地

国境の峠求めてさ迷いぬ
ガラガラの岩山に立ちカイラス見ゆ
すぐそこにマナサロワール青く澄む
カタ捧ぐ誰が建てたか大ケルン

四. 目標の登山

ナラカンカール・ヒマールの中で狙った山は、ナラカンカール東峰六〇五六メートルだった。進路を西にとる。ギウ・コラ左俣を遡る。仮BCの地で西日を背にしたナムナニ峰がはじめてクッキリと姿を見せてくれた。逆光だったのは悔しい。翌日BCを設営し、更に小氷河湖畔にACをだす。早朝目前のナラカンカール東峰を目指し、そして登頂した。(七月七日)ピッケル・アイゼン不用の岩石のガラガラルートだった。この日はお天気が一番悪く、風は冷たく上部で霰、下部は雨であった。視界は不良で我々は全くついていなかった。自分は東峰と北峰の間のコルに到達し、黒雲のチベットを眺めて満足し下山した。

ナムナニの東壁を見て絶句せり
尖頂のナムナニ峰はゴツイかな
登頂前団欒のBC夏日濃し
アイゼンを一月ぶりに取り出せり
最悪の天気となりぬ登頂日
顔腫らし一氣に下る雨の中

五. 次の山、ナラカンカールハイエストを目

まっすぐ南へ転進し、迂回の上、南面から攻撃しようとの作戦である。七月一〇日は五〇〇〇メートル台の高地を南へ縦断する行動変化の激しい一日となった。即ち、ドンと登り、湖のある台地を横切り、ドンと下って流れを渡渉する。これを二回繰り返す。西の国境ラインであるナラカンカール・ヒマールは終始雲の中だった。しかし、チラリと見えたナラカンカールハイエスト六四四二メートルは、マッターホルンの如き鋭峰で裾長き氷河を従え、それは見事な山容であった。高揚した気分よいよ旅の最後は、岩石累々のハルジ



指す

谷であった。余りに急峻で完全に顎を出してしまつた。ハルジ村に届かず、谷の半ばあたり、遊牧民のカルカ傍にテントを張る。南の谷底にフムラカルナリ河の支流タクチェチューが東から西へ流れているのだが見えない。深い谷である。本日のルートは、四〇年前グルラマンダータを求め探険した北大隊が辿つた道ではないかと推察される。

雲多く廣大風景値打ち下げ

荷運びのヤクの歩みに追い抜かれ

はぐれたるヤクの子さすが追い着きぬ

天国に近い高原池塘あり

急降下岩陰の花に励まされ

気合入れ氷水の河を渡りきる

膝笑いカルカの傍にへたばりぬ

六・登攀の基地ティル村

廻りこんだ谷、狭いティル谷を登ると、上部は懐の深い開けた土地となる。ここはティル村で青々とした麦畑が、灌漑用水のもと手入れが行き届いていた。厳しい山岳地形の中にあつてエアポケットのように温暖さを保っていた。桃源郷と云えるだろう。人口二〇〇〇人、二四所帯、一妻多夫のようだ。登山隊は谷奥へルートを求め出発したが、上部は悪天続きで時間切れ、登攀断念に追い込まれた。その間、一人で静養していた自分は、四角い石積み住居とチベット人の生活を写真にとる。服装は近代化したとは云え、中味は川喜田二郎「鳥葬の国」のチベット人そのものだ

つた。この一週間は自分にとつて極彩色の天国であつた。帰国後、ティル村につき一冊の写真集にまとめた。

ティル村で着放しの冬衣脱ぎ捨てる

極彩色ゴンバ内陣仮面あり

ポリタンで朝の水汲み夜終る

老婆の手日がな一日マニ車

石積みの伝統家屋に目を見張る

築石に芸術性あり仰天す

屋上に天にも届け祈り旗

奥の間に仏と經典鎮座せり

七・カイラス街道の入り口、ヒルサ

七月二〇日にティル村を発つ。普通は一日行程であるという国境のヒルサへ向う。が、我々の弱足は、途中のマネペメで一泊となつた。この西行きの道は、V字谷の深い底を流れるカルナリ河をはるか左下にしての険悪で巖しい道だつた。ラムカ・ラ峠四三〇〇メートルあたりは、グランドキャニオンのような谷の様相であつた。切り立った岩場を行く我々の横下を大ワシが悠々と舞っていた。引きずり込まれるような錯覚をおぼえた。山腹の道は、どこまでも続く。赤茶けた西域の山波の尽きる所で、真下にカルナリ河と鉄橋を見出す。四〇五〇メートルぐらい下だろうか。緑色の麦畑があつてまぶしく感ずる。ヒルサだつた。少し上流の左岸高台に中国の国境監視所があつた。目を凝らして橋を見ると、黒いヤクの大群が延々と渡るところだつた。

我々は銃を持つ中国兵を避けて、ネパール側のがけ斜面を転がり落ちるように急降下する。ポーターの一人は足を滑らし、七〇メートルも転落した。幸い無事だったが、あとになつて監視所の前を通る迂回の立派な道があつたと判る。最短距離とは云え、馬鹿げたことであつた。

シエルパ達は二日間の休暇を得て、マナサロワールの聖水を貰いにいった。帰りにタクラコット(ブラン)で新鮮な野菜を仕入れてきた。欠乏の我々は大喜びだつた。なかでもエクアドル産の見事なバナナがあつて、中国の流通経済には驚きあきれるのであつた。

国境の橋のたもとに茶店のみ

山羊の群スイス援助の橋渡る

やぎひつじ数えてみれば四百頭

中国兵橋渡り来てビール飲む

ちよこまかと子供が手伝う雑貨店

鉄砲打ち空手で通るテント傍

八・帰路のあれこれ

ヒルサ(三六〇〇メートル)からの最初の道は滑り台のような急坂だつた。ナラ・ラ峠(四六〇〇メートル)越えは大変だつた。強風の峠を南に下ると荒廃した景色はガラリと変わり、緑の世界となり、帰ってきたとの実感を得る。あとはフムラカルナリ河沿いのカイラス街道を下っていく。ムチュウにチェックポストがあつて、パスポートの提示を求められる。今年は一〇〇〇人ばかりが通過したとのこと、通常は三〇四

○○○人とか。今年の日本人は貫田行男パーティの一〇人のカイラス行くと、外国パーティに参加の二人だけだった。入国については六月のアメリカパーティ四人と我々の一〇人だけであった。

七月二十八日、二か月振りにシミコットに着く。先行のシエルパが飛行機を抑えていて、それに慌てて飛び乗る。翌日から大雨となり、各地に水害が発生。次のフライトは一週間後であった。間一髪で脱出出来たのは、まことに幸運であった。その日のうちにカトマンズに帰着する。

下り道出くわすインンドの巡礼者
ナマステと交わす挨拶余裕でき

ピンビール求めて喉のゴクリかな
清流で頭髮洗い鏡見る

赤色の見慣れぬ作物ヒモゲイトウ
里心食べ物みやげが話題なり
おしまいの峠に立てば空港見ゆ
なつかしの山にはもはや雪はなし
死にもせず辺境の旅幕下りぬ

(一一月二八日受理)

西大巔登山記(下) 森本陸世君不慮の死前後

本多 勝一

「森本が変だ！」
沖津君がそう叫んで私の部屋にとびこんで

きた。その顔色をみただけで、これはただごとではないと察した。すぐに沖津・森本組の「うぐいす豆」部屋にかけつける。

あつ。これは異常だ。二つの寝台の間に、下向きで倒れたままの姿、顔色は血の気が失せている。手を当ててみると、すでに“虫の息”どころか心臓さえ動いていないかみえる。心臓マヒか脳内出血か。倒れるときに両手を床についたような形跡はなく、あたかも銃弾一発でいきなりぶつたおれたかのように両手が両脇にある。まさか犯罪には関係ないにせよ、このまま死ねば変死ではあるし、病因不明のままここでへたにうごかすこともできない。クモ膜下出血で死んだ母と、脳幹部出血で死んだ父のことが脳裏をかすめた。あるとき医者に「動かすな」と指示されたことも。ただちに池田氏(ペンション主)が一〇番で救急の手配。

ここに到るまでの経過を、沖津君からあとで聞いた。私たちがペンションにもどつたとき、沖津君はそのことを森本君に知らせるべく、二階の自室に行った。ノックしても応答がないし、鍵がかかっているらしい。まだ眠っているとみて、風邪でもあることだから出発ぎりぎりまで休ませておこうと、いったん下の食堂にもどり、スキーの手入れなどした。五分ほどしてまた行き、こんどは大きな音でノックした。応答なし。さらに力いっぱいたたいても。隣室の伊藤君の所へ行つて「ノックしても反応がない、どうしたんだらう」と話し、その時になって「おかしい」と

直感した沖津君は、下へおりて池田氏を呼び、4合鍵で戸をあけてもらった。結果が前述のとおりである。

二つの寝台の間に倒れている森本君の頭は厠の側にあり、ぬいだズボンが入口側の寝台の上におかれ、メリヤスのズボン下がぬぎかけたような位置まで少し下げられた格好だ。窓側の寝台にはトイレット紙が、たぶんメートルたらずの長さだけ無造作につくねられている。その他のものはすでに旅行鞆にすべて入れられ、部屋は整頓されていた。ヒーターはついていない。休んで眠っていたといううな形跡ではない。

あまりのことに私たちは狼狽していて、あとから考えても自分たちの行動の詳細を再現できにくいのが、伊藤君の記憶だと暖房が相当暑く感じられ、テレビがつけっぱなしになっていた。手首の脈をさぐってみたが、停止していたのかどうか、ともかく分からなかった。呼吸もなかったが、硬直はしていなかった。伊藤君は言う。室温が高いせいか体温も冷たくなかったとも。また沖津君の記憶でも、森本君のからだにふれると暖かくて柔らかだったが、軽くゆすつても全く反応がなかった。そして「森本君が倒れている両側のベッドはきれいに整備(ベッドメーカーキング)されており、使用された形跡は全くなかった。また森本君がベッドのシーツや毛布に触つたような形跡も全くなかった。彼の個人装備、靴や衣類はきちんと整頓され部屋の隅に置かれていた。全てが整理されていた。真に不思議な情

況であった。」(沖津君のメモから)

池田氏によると、私たちがこの朝出たあと、森本君は玄関口にあった自分のスキーを袋に入れ、荷造りしてから二階の部屋に行った。もちろん休む(寝る)ために行ったと、池田氏は思っていた。

会津若松市の救急車が十数分で到着した。福島県は「ドクターズカー」方式の運用に力をいれているという。つまり普通の救急車方式では間にあわないような緊急事態の患者の場合、ただちに救急車がまず駆けつけたあと、医者と看護婦の乗った特別救急車も出発する。これには救急用の医療器材や装置・医薬品などを備えていて、救急車が患者を運んでくる途中で(間にあえば現場まで行つて)迎え、応急処置をしながら救命救急センターに搬送するのだ。

救急車の係員たちは、救急隊員三人を含めて全員が、担架とともに部屋にかけつけた。うつぶせの体を上向きにして、酸素吸入処置をしながら人工呼吸をこころみつつ、心臓に耳を当てたりしたが、反応はなさそうだ。早急に病院へ運ぶこととなり、担架で車内に運び込む。伊藤君が同乗し、あと三人は伊藤君の車でそのあとを追った。

沖津君のメモから——「緊急事態である、大変な事態が発生したことを森本君の自宅や関係者に伝えねばならない。携帯電話機を持っていたので車の中から森本君の家に電話をしたが、留守でつながらない。AA C K関係者に連絡を試みた。曾根原、岩瀬

と。しかし両者とも応答なし。関西の酒井氏?にも電話したが、応答がなかった。: : : この所は間違っているかも: : : 気象協会に電話し応答を得る。初めは内容をそのまま伝えるのをためらい、森本家に連絡したいと伝えたが、結局大変な事態の内容を協会の方に伝え、緊急の心配をお願いした。」

伊藤君のメモから——「昨夜の雪は一五センチメートル位積もっており、折からの日光でベトベトの雪道となり、救急車はサイレンを鳴らしながらもスピードは出せないようであった。救急車に乗った直後から蘇生作業開始(森本を上向きに寝かし、隊員一名が心臓圧迫作業、一名が圧迫終了と同時に酸素供給)。以降ドクターが来るまでこの作業の連続。心臓圧迫作業がきつそうなので私が代わりましょうと申し出たが、伊藤さんは森本の手を握って彼に呼び掛け続けてくればいいと。彼の手が暖かくなることを期待して大声で呼び続けたが、in pain、目がぱっちり開くことを期待して大声で呼び続けたが、in pain。早く大きな病院へと気が焦るばかりであった。」

「二時四五分ドクターカー(医者も看護婦も同乗)福島県自慢のシステム)とおち合い路上で森本をシフトする。我々の救急車に比し二回り程大きく、非常に頼もしく見えた。私も同乗しようとしたが、ドクターには後は任せなさいと拒否された。我々の救急車はフォローするが、もうサイレンは

鳴らさず次第に引き離されてしまった(一五時〇六分)。」

行き先は会津若松市内の「会津中央病院」である。救急車の方は喜多方消防署北塩原分署救急隊のもので、「豆わらじ」に比較的近く、それで思ったより早く到着したのであった。

救急車も病院に着き、伊藤君が集中治療室にとびこむと、ベッドに裸でねかされた森本君に医者と看護婦が蘇生措置の最中だったが、伊藤君はすぐに外へ出された。そのあとまもなく私たち三人も病院に到着した。集中治療室をのぞくと、大規模な蘇生装置の下で横たわる森本君がかいま見えたが、医者に明るい表情はなく、装置の規則的な音ばかりが、どうにかならぬかと焦る胸を一層しめつける。

やはり室外で待つようながされて出ると、まもなく「豆わらじ」の池田氏も心配して来てくれた。さらに仙台からも気象協会の棚橋輝彦氏(同協会東北本部長)がかけつけてくれたが、狼狽していたせいか、それがいつの時点だったか思いだせない。森本君の親友でもある棚橋氏が、協会関係の人々への連絡などを迅速にすすめてくれる。伊藤君のメモに、「一五時四三分、医者より事情聴取」とあるが、どんな事情聴取の風景だったか、これも記憶にない。あとで地元警察からも事情聴取があった。

午後四時半ごろ(のはず)、担当医師(小川氏)が集中治療室から出てきて言うには、

もはや蘇生の望みはないこと、これ以上つづけると肉体に損傷が生ずるおそれがあること、もはやあきらめざるをえないこと……。

だめだったか。死亡は午後四時三四分と伝えられた。クモ膜下出血。死の「宣告」のようなきこえた。医者からは「家族のショックが大きいから、死亡はまだ伝えられないように」と言われ、さらに「家族が到着したら、医者のもとへすぐに直行させて下さい。あなたたちからは何も説明しないように」と命ぜられた。

以後、森本夫人と二人の娘さんが到着するまでの五時間余。その、つらく、みじめで、悲しい時間の気持ちを表現すべき言葉を、もはや持たない。やさしい父親だったに違いない森本君の、娘たちの悲しみはどんなだろうか。自分の妹や親たちが死んだときの思いが、切れ切れの断片となつて脳裏をかすめる。最後に、伊藤君のメモから転記してこの「登山記」を終わると同時に、あらためて森本君のご冥福をお祈りしよう。

「二一時〇五分ご家族が到着。直ちに医者の待つ別室にご案内し、我々は室外で待機する。暫時の間を置いて、突然、ご家族の悲鳴、号泣が聞こえた。今でも耳に残っている。この時のどうしようもないやりきれなさ。これほど苦痛を味わつたことはない。」

「霊安室で変わり果てた森本と対面後、ご家族に情況をつぶさに説明する。表面的には冷静に聞いておられるご遺族の心中察するに余りあり。」

終わり

追記 次号で、この事故についての齊藤淳生ドクター（Yさん）による診断と、前日の本多到着以前の情況についての沖津文雄氏の報告を掲載の予定。
(平成十三年四月受理)

只見川袖沢御神楽沢

芝田 誠通 投稿

日 時 二〇〇〇年九月十五日

〃 九月十七日（二泊）

メンバー 高尾文雄、芝田之克、芝田誠通

九月十五日（金）晴れ、フェーン現象で暑い

新幹線浦佐七時三九分着、バス八時〇九分

一〇分奥只見ダム、袖沢本流出合十時四五分

発ミノコクリ沢出合（橋）一四時三〇分

取水口一五時四〇分ミチギノ沢出合一六時

三十分浦佐駅前からのバスはシルバークライ

ンを快適に飛ばし約一時間でダム下のケーブル

カー駅に着く。料金九百円十荷物代百円は安

い。土産屋の主人に工事で九月末までは袖沢

林道へは入れない、地元の人でも入れてもら

えないと言われる。山溪などに通行止めの家

内を掲載しているとの事。半信半疑で道路を

歩いていくと、工事用車両（ダンプ）がたく

さん走っており林道の入口にガードマンが三

人いて進入を断られた。この道路は電源開発

の管理用道路で工事用車両の安全確保の為十

月中旬まで工事関係者以外は通せぬと言う。仕方なくゲートから二〇〇メートル程引返し駐車場脇で作戦会議。工事は只見川下流部で行われており袖沢林道に入ってしまった問題は無いこと、林道を通らず袖沢へ入れば文句は無いはずと協議の結果、駐車場裏から藪に入つて道路を二度横切り（途中ダンプが来ると身を隠し）本流へ下降成功ワラジ（溪流シューズ）に履替え出発。ダム上部の工事関係者に見つかることを気にしながら急ぎ本流を渡り袖沢に入つて沢をしばらく歩いてから林道に上がった。

夏の間人が入っていないというところは岩魚が一杯釣れるに違いないと（本流で早くも魚影が見えた）胸をふくらませて林道を歩く。林道はよく整備されておりミノコクリ沢出合すぐ手前の小屋まで車通行可能、（その先の斜面がガレ場で車通行不能）ここから先は雑草が多いが林道ははっきりしており取水口まで続く。途中、林道偵察の車一台（林道を使うことを大目に見てもらおう、会わなかったことにして戴く）、釣師に三度ほど会った。取水口から左岸沿いに（不明瞭な）道がありそれを辿り大滝を越えて次の小沢を降りて本谷に入る。取水口から上はさすがに本流だけあって水量が豊富であるミチギノ沢出合（右岸）には何と六、七人の釣師が先に幕営しており釣つた岩魚（大物で約四〇センチ）をたくさん焼いていた。この先には適当なサイト地が無いとのことでミチギノ沢出合左岸側のサイト地に幕営する。上流で少し釣つてみるが全

然ダメ、乾燥した流木を沢山集めて炎の大きなファイヤーで楽しむ。二一時酩酊して就寝。

九月十六日(土) 晴れ、夕方から小雨

起床五時十分、六時三十五分出発―釣り数回―ムジナクボ沢手前一五時十五分

今日の工程は長くはないが途中でたつぷり釣りをする為に早く起きる。木が乾燥して火付けが早いと薪ワークは実に早い。大きな魚影を見る度に竿を出す。持参したミミズが全部死んでしまいそのミミズでは全く食わない。それと昨日の釣師がかなり上流部まで上がって来ており苦戦する。ミミズを諦めトンボ、川虫、サンショウウオ、カタツムリの切身でRYするとすぐに釣れた。自分の竿は調子が柔らかく三〇センチものになるとゴボ



ウ抜きが出来ず苦労した。Cont一三〇〇付近まで魚影が見え好ポイントの度に竿を出したが餌の補給が間に合わず二〇センチ以上五匹の釣果。

難易度の高い滝の直登は少なく、巻道もすっかりしており安全な沢である。Cont一五五〇付近の滝右岸を巻き終ったところで幕営、ムジナクボ沢出合上部(本流右岸)にも大きなテントサイト地があったがファイヤーがし難いので手前で泊まる。流木が少なく大きなファイヤーは諦める。明るいうちに夕食となったが夕方から小雨模様。岩魚は時間を掛けてゆっくり焼く。一七時前に五人のPartyが遡ってきた。桧枝岐から入山し稜線からミチギノ沢を下り今日で二日目とのこと。袖沢林道が入れないことを知っていた。

九月十七日(日) 雨、日中は曇り、一五時頃から大雨

起床五時十分、七時十分出発―稜線九時三五―会津駒ヶ岳十時―駒の小屋十時四〇分発―四時五〇分―一六時二〇分会津高原駅、一六時五八分快速一九時五十分北住着

小雨の中火付けに苦戦し出発が遅れた。傘を使い何とか飯盒炊飯する。昨日の五人Partyをじきに追い越す。水を汲んで最後の二股を右へ入り小沢を詰め駒ヶ岳北西のCOLを目指す(その方が熊笹が少ない) 沢が無くなり十五分程熊笹を漕ぐと稜線に出た。雨も上がり時折ガスが薄くなるが遠望はきかない。頂上で証拠写真を撮り直ぐに小屋へ向かう。きれいな小屋だ(素泊まり三千円) 中年登山ブームで女性の山屋さんが目立つ。落差一二〇〇メートルの下りは道が歩き易く楽に下れた(百名山効果?) 村役場近くの村営の温泉(五百円、屋外風呂あり) に入り、その後そば屋で反省会。村で一番の老舗で截そばの看板(ノボリ) が掛かっている。そば粉一〇〇パーセントの本物で腰の強いざるそばを楽しむ。店の壁に大きな新しい魚拓が張っている。最大は一尺六寸、場所は秘密らしく奥只見ダム上流とだけ書いてあった。小さいものでも四〇センチはある。今日釣ってきたと言う岩魚を四、五匹見せてもらった、三五センチはあった。一四時過ぎから本降りとなり会津高原駅でバスを降りる頃には大雨となった。赤石沢へ行ったPartyを心配する。

岩魚は一匹しか釣れなかったと言う。男三女二人の強行軍であり釣っている暇が余り無かったと思われる。天気図(台風接近中)を見せてやり上流のサイト地を案内した。雨は小降りでおさまり岩魚は上手に焼けた。三〇センチ級は肉が厚く食べ応えがある、メスは卵に栄養を取られ身が細い。大きなファイヤーにならず二〇時三十分就寝。

台風接近、近畿・中部・関東と天候不順の中フェーン現象で好天になるなど天気恵まれ、岩魚も程ほどに釣れて安全な楽しい沢登りであった。八月の平ヶ岳―恋ノ俣川に続き岩魚も釣れて充実した沢登りとなり、来年もまた魚の釣れる沢に行けることを願ひ帰京した。

下山後二日間程筋肉痛がひどかったがまだ来年も行けるかなと自信を持てた山行となった。

十月の連休はお休みしてその次の週に妙高・笹ヶ峰京大ヒュッテに家族四人で遊びに行く予定。天気が良ければ皆で高谷の池、火打山まで行きたい。(まさみち)

(一月二五日受理)

南極を夢みた頃

—今西さんと園子夫人の思い出—

北村 泰一

AACKの若い会員は、名前を挙げてでも事件を言っても知らないと言うかも知れない。それ程昔のことである。しかし、私の友人たる熟年者 (Young at Heart) は、そのことを思い出してくれることを期待する。今から四〇年?五〇年程前のこと、そう、Young at Heartがまだ真正正銘の青年であった頃の話である。

この稿は、私の今西さんに対する思い出を書くが、西堀さんはその二として書きた

いと思う。

また、この稿は自分の記憶だけで書いたので誤っている部分があるかも知れない。そんな点があったら、是非、指摘して頂きたい。

今なら誰もが口に唱えている『パイオニア：』という言葉も、当時の我々(一九五〇年代の後半)には新鮮であった。

『世界最高峰の第二登頂者たるよりも、低くてもよい、初登頂者たれ』とか(世界最高峰のエベレストは、在部中の一九五三年にヒラリー・テンジンによって登られた)『主流より、辛くても反主流の道を……』とか『どんな分野でも、パイオニアたれ……』とか言う京大山岳部の教えは、新人生たる我々の心には砂漠の水のようにしみわたった。

『僕の前には道はない……僕のうしろに道は出来る……』と大声で山頂で怒鳴ったりしていた。

こんなことは、今西さんや桑原さん西堀さん達、山岳部創部の先輩たちから、直接、特に教えられたことはなかったが、何かにふれて、そういうことが頭にしみこんだ。

その頃、『パイオニア』と言う言葉は、地理的な未知にしかあてはまらないように思っていた。学問的なパイオニアは想像の外だった。頭脳的な未知への探検は、当時は自分で出来るとは思っていなかった。世界の地理的な未知を尋ねて、これをパイオニア・ワークと言うなら、それなら自分でも

出来るかも知れないと思っていた。

『パイオニア』は、今西、西堀氏の学生時代(昭和の初め)には、日本の中でいろいろなことが実現できた。どこそこの谷を遡るとか、冬季のどこかの山頂とか……。

だが、我々の時代(昭和二〇年代(一九四五))には、もはや国内で『パイオニア』を実行することは不可能であった。わずかに知床にその臭いを嗅いで、そこへ出かけたりして自己満足を味わった。本当のパイオニア・ワークは、ヒマラヤの未登峰か中国の奥か、南極にしかない信じていた。

だから、山岳部の Young at Heart (現在の) は、皆、外国へ出たがっていた。私も同様であった。だがその手段がない。その頃は、海外へ出るにも国家の許可が必要で、その上、外貨もそうおいそれとは手に入らなかった。だから、京大『学術』登山隊と、殊更に学術を強調してみたり、パキスタンのパンジャブ大学との『国際合同』パンジャブヒマラヤ登山探検隊(本多勝一集第四卷『探検部の誕生』)と言ってみたりした。

一九五七年から一九五八年は、第三回国際地球観測年 (IGY, International Geophysical Year) と呼ばれ、日本は南極へ学術探検隊を送ることになった。これにまつわる話には、いろいろな面白いものがあるが、それはまた別の機会を見て話そう。

そのIGYに遡ること数年前の一九五五年の春である。その時、私は理学部の地球物理学専攻の大学院修士一年であった。

直接の指導教授、長谷川万吉先生（京大教授、故人）が、永田武東大教授（故人、のちの南極観測隊長）、青野雄一郎電波研究所長（故人：…などを引き連れ、時の日本代表の団長となつてブリュッセルの南極会議に臨もうとしていた。この会議は、各国が具体的にその国の南極計画を発表する（何処に基地をつくるのか、その規模とか）最後の会議であつた。

その頃、日本はまだ敗戦の雰囲気もおさまらず、国は四等国家として世界からは相手にされず、我々自身も何か負い目を感じて世界の片隅に小さくなつていた。勿論、国際地球観測年に南極へゆこうとする世界的な国際会議には招かれもしなかつた。

しかし、このブリュッセル会議が、南極へゆくための最後の打ち合わせのチャンスであつた。この会議で南極ゆきを表明しないと、日本が南極へ探検隊を派遣することは出来ない。その会議には招待もされず、また、学者の外国旅費もなかつたが、こへ日本が厚顔にも押し掛け出席した経緯にも面白いものがあるがこれも譲らざるを得ない。

先述したように、その頃は自由に外国旅行も出来ず、また、旅費も高額であつた（パリまでの片道は四〇から五〇万円。勿論エコノミークラスで）。京都大学教授や東京大学教授で日本の代表といえども、そうやすやすと外国には出ることは出来なかつた。

出発の少し前、その長谷川万吉先生が私

を呼びつけた。長谷川先生の話はまだるつこしいので有名であつた。何かを言いかけて、その状態のまま何分も沈黙の時間が流れるのである。その間、次の言葉は何であるうかと待つのである。その長谷川先生が私を教授室へ呼びつけた。

『ハイ。北村です：：』
と云つて、教授室の入り口で不動の姿勢でとつた。

先生は、『おお北村君か：：』
と云つて、そのまま言葉がとぎれてしまつた。先生は私に背を向けて窓越しに外を眺めてしまつたのである。私は長期戦を覚悟した。それから一五分ほど沈黙の時が経過しただろうか。先生は、クルリとこちらに向きなつた。

『君い、南極へゆかないか？：：』
先生はポツリと言つた。話しはそれで終わった。だが、僕の胸にポツンと灯がついたような気がしたのはこの時からであつた。私は、長谷川先生がブリュッセル会議からの帰国を首を長くして待つていた。その後の進展、南極会議での様子などを聞きたかつたからである。

ところがどうしたことか、その長谷川先生は、帰国後、私と目をあわせてもそしらぬ顔。私に南極へ行かないかなどと言つたことはすっかり忘れたという様子。南極会議のナの名も先生の口から出て来なかつた。いらいらした数日がたつたが、学生から

『先生。あの話しはどうなつたのですか？』
などと聞くわけにもゆかなかつた。

そうこうしている時、日本の南極学術探検隊派遣のことが朝日新聞（ある事情で朝日新聞独占）に載りだした。そして、とうとう五五年の九月に、朝日新聞は、『日本の学術南極探検隊の派遣を援助するために、朝日新聞社は国に一億円寄付をする』という社説を新聞一面に大きく掲載した。その頃の一億円は大変な金であつた。当時の国家予算が数十億であつた時代である（現在は七〇兆円である）。

（このことは（二億円という金額）、後になつて『盲信は成功のもと』という格言を生み出した。一億円程度だと信じたから、政府も南極をやる気になつたが、実際は十億円かかつてしまつた。初めから十億円もかかるかも知れないと知つていたら南極を始める気には到底ならなかつただろうという見方がある。だから、事を始めるに至つて、余りすべてを知らずに『必ず出来る』とだけ盲信することが成功への道に連なるという結論が出てくる。一種の自己暗示療法のようなものである。これは西堀さんのいう『石橋を叩くと渡れない』というのと似ている）

だが、私達は、この記事でブリュッセル会議の様子、そして、今、何が進行しているかを知つた。

長谷川先生から、その後の何の音沙汰もないままに月日が過ぎた。南極の話は、今

西さんから時々聞くことくらいであった。今から思えば、それは北海道の加納一郎さんからのニュースとか、東京の西堀さんからのニュースであった。

そんなある日、今西さんから南極研究会を作ってはどうか、との話があった。長谷川先生から何か聞かれたのかも知れない。

直ちに南極研究会なるものが出来た。一九五五年の春頃だったろうか。長谷川万吉教授を会長に、今西さん、桑原さん、吉井さん（良三氏、故人）にメンバーになって貰うことを乞うた。近衛の楽友会館などで会合を開いた。目的は、進行しつつある日本の南極計画のニュースを紹介すること、もし可能ならば、南極に京都から一人でも二人でも隊員を送りこむことであった。

一九五六年一月から二月にかけて、南極の予行演習として、北海道の湧湖で設営の訓練があった。参加者は、各学会から隊員にと推薦された研究者と、東京で設営を準備している人達であった。我々、京都勢には声はかからなかった。

内心我々は焦った。コトは東京でどんどん進行している。

その内に、西堀さんが副隊長になることが決まった（一九五六年二月）。

ある南極研究会の時、今西さんが発言した。

『南極のことは、今東京で進行している。京都に居て、お座敷がかかるのを待っているようではアカン。誰か東京へ行け……』

そんなこと言ったって、身は京都（で学生）なのに、どうしたら東京で生活できるのか？京都のいろいろなこと（身分とか）をどうするのか？

我々は焦った。三月には乗鞍でのスキー訓練が実施された。参加者から隊員が選ばれると聞いた。たまりかねて、招かれもしてないのに数人押し掛けた。平井一正、山口克、川口章などの諸氏と私であると記憶している。先輩の中尾佐助さん（故人）が参加しておられた。一体どういう道すじでだろうかといふかったが聞くことは出来なかった。

なんとか南極の計画関係者に渡りをつけたい。可能な道は西堀さんにしかない。西堀さんに会う方法はないか。しかし、西堀さんといえば遥かな先輩。伝説中の大先輩だ。西堀さんの手にかかる、普通の木の板がみるみるスキーに変わるとか、比良で猪を素手でしとめたとか、西堀神話なるものは常々聞かされている。そんな人に、どう渡りをつけたらよいのか？会ってくれないに決まっている。

鍵は今西さんである。噂によると、今西さんの妹さんが西堀美保子夫人である。南極への突破口は、今西さんに紹介状を貰うしかない、となった。

一九五五年の二月か三月であったと思う。南極を志す山岳部数人の有志を語らって、AACKのルームのある百万遍から、下鴨の中川原町の今西邸をたずねた。目ざすは、加

茂川沿いの道にまでせり出す今西邸の大きな木であった。夕方七時すぎ頃であった。

園子夫人が応対に出られた。すぐに奥へ入られて、錦司先生の意向を尋ねられたらしい。

『今西は、いま、お酒をいただいているのですよ。もう少しお待ちくださいな。ここで……』僕は玄関で腰をかけて、今西さんの酒が終わるのを待った。

一時間すぎた。まだ終わらない。

二時間すぎた。今西さんの晩酌はまだ終わらないらしい。目的は、西堀さんへの紹介状を貰い、我々の誰かが東京に西堀さんを尋ね、南極の進行状態を聞き出すことであった。だから今西さんのご機嫌をそこねてはならない。何とか、今日中に紹介状を貰わなくてはならない。ここは我慢のしどころだ。

今、それを思い出すと、昔の教授は威張っていたものだ、と思う。自分が教授になってみたら、学生を玄関先に待たせて、一時間も二時間も酒を飲んではおられない。これはやはり今西さんの貫禄か。

園子夫人が気の毒そうに、時々、こちらの様子を見にこられる。三時間すぎ、四時間になるうとしていた。時計は夜十一時に迫ろうとしていた。我々はまだ玄関先で座りこんでいた。

園子夫人が気の毒そうな顔をして奥に入られた。やがて、出てこられた。とりなしていたら嬉しい。

やつと、今西さんに会えた。今西さんはまた酒を飲んでる最中で大機嫌であった。今西さんの談論には圧倒された。紹介状どころではない。話しはアフリカのゴリラからいろいろなことに飛び、Y談まがいのきわどい話しまで及んだ。

『ワシが寝ていた朝の四時頃のことじゃ。急に横腹が痛くなって目がさめた。隣に寝ている園子に診て貰おうと思つて、園子の手をまさぐり、ワシの下腹に導いたのじゃ……』

園子は『また……』と言つて邪見にワシの手を払いのけよる。ワシは横腹が痛くてかなわん。

『違う。違う。アイテテ……アイテテテ……』と悲鳴をあげると、やつと園子も気がついたので……といった風である。我々はただ、ゲタゲタと笑つて時を忘れた。

その夜、今西邸を辞したのは朝の二時頃だったろうか。そこから、大声で何か歌をうたつて百万遍まで、さらに、私の南禅寺の家まで歩いて帰つた。朝の三時を廻つていた。手には紹介状があつた。

園子夫人はその時のことを覚えておられたのであろうか。その後、私がいよいよ南極へ出発するために京都駅を出発する時、『可愛い娘さんが、一寸首をかしげている人形』を餞別に下さつた。腕にはカードがそえてあり、『南極。大はりきりの北村さんへ』とあつた。それはとても可愛いものであり、昭和基地で憂鬱なときの私を大変慰

めてくれた。

この人形でもう一人思い出す人がいる。今西家の皆子さんというお嬢さんである。この頃、私は高校か中学の先生になろうと教育実習をしていた。下鴨中学だと思つた、そこへ教生といつて、いはば将来の先生の練習をしていた。

そこに妙な女の生徒がいた。何が妙かと言つと、ある作文で趣味を書かせた。『私は、木登りが大好きです……。木に登つてあちこち眺めていると……』というものであつた。高いところが好きなのは、バカかアホウに決まつている。この子はバカか、と思つた。だが待てよ。我々も高いところが好きだ。今西親分も好きだ。あれ？作文には『今西皆子』と書いてあるではないか？ひよつとしたら？聞いてみるとそうだった。なるほどなあ、フーンと思つた。その人形は、皆子さんと園子夫人の合同の餞別かもしれないなかつた。

人形の衣服など少し虫が食つて穴があいているが、それは今、なお私の家の居間にある。

下鴨中学の私の受け持ちクラスには、もう一人男の生徒がいた。大沢忠嗣君であつた。彼は良く出来た。後年、彼は京大の医学部へ入り、そして山岳部へ入つてきた。どこかで見たヤツだと思つていたら、それが、皆子さんと同級の大沢忠嗣君であつた。いま、今西家のことを語つているので、残念ながら大沢君のことは割愛せざるを得ない。

園子夫人は、その後何十年かして亡くなられた。今西先生から園子夫人逝去通知がきた。その文面は寂しげで、相思のサルが、相手が死んでションボリしている様子を連想させた。あの時、アフリカのサルの話が強烈な印象で残つていたせいかも知れない。その頃、私は九州大学に勤務していたが、勿論福岡から京都へとんでいった。

御遺影はかすかに微笑んでこちらを向いておられた。手を合わせ、昔のことの御礼を申し上げた。園子夫人があの時とりなして下さらなかつたら、我々は追い返されていたかも知れない。そうしたら、西堀さんに会うことはできなかつただろう。そうしたら、南極へ行けなかつただろう。そうしたら、犬達とも無縁になるし、タロジロとの縁もできない。その後の自分の人生は大変違ったものになつていただろう。手を合わせながら、有り難う御座いました、と心から御礼を申しあげた。

さて、紹介状は手に入つた。これで何とか道が見えてきた。長谷川先生は、南極研究会ではいろいろの発言しているくせに、僕に言ったこと（『北村、南極にいかなか』）はケロリとして知らん顔であつた。

西堀さんへの紹介状を貰つた頃には、一層、南極への夢は膨らんでいた。ここでひとつ告白しておこう。本多勝一氏（京大山岳部員、京大探検部創始者、元朝日新聞論説委員、週刊誌『週刊金曜日』元編集長）のことである。彼とは、一時、一つ屋根の

下で一緒に生活したことがある。彼だけではない、Yさん（斎藤淳生氏）ともそうであつた。コッテ（松浦祥次郎氏）との縁もその時に出来たが、その経緯は、これまた別の機会にお話ししよう。彼等を中心に、現在の Youth at Heart 達が家が家に群がっていた時がある。昭和三十年（一九五五）、南極へ出発する一年前である。一言で言えば、私の家を下宿に解放していたのである。その時、山岳部、スキー部の友人達の何人かが生活していた。私は家主であつた。

そんなこともあつて、本多勝一氏とは、春の黒部横断をしたりいろいろ山行をともにしていた（本多勝一著『本多勝一集第四卷（探検部の誕生）』参照）。

告白のことであるが、私の南極への熱が高くなつたのを見てか、本多勝一氏が『こんながあるよ：』といつて部厚な、悪い紙質の本を見せてくれた（戦争中の本らしい。悪い茶色のセンカ紙の本であつた。昭和一九年朋文堂刊とあつた）。それは『世界最悪の旅』というスコット隊の話であつた。チェリー・ガロードというスコット隊員の著であつた。南極文学の名著と噂されていた。加納一郎氏の日本訳もよかつた。

『探検とは？：知的情熱の肉体的表現である：』。私が今でも口にしてるその言葉は、その本の末尾に書いてあつた。その時、それを読んで、長い間探し求めていたものを見つけた気がした。我が意を得た感じがした。そうだ、その通りだ。探検とは、

知的情熱の肉体的表現なのだ！

後に、私はある解説（朝日文庫一九九三年刊『世界最悪の旅』）に、『その言葉（探検とは、知的情熱の肉体的表現：）を読んだ、何人の青年が胸を焦がし、ヒマラヤに砂漠に、そして極地の氷原に赴いたことだろうか：』と書いた。これを読んでいる皆さんにも覚えがあろう。

本多氏が貸すと言つたか言つてないか、私はその本を手放さなかつた。

その本は以後、私の愛好本となり、のち、南極第一次越冬の際にも昭和基地の私の傍にあつた。表紙の裏には、西堀さん以下、第一次越冬隊（一九五六から一九五八）十一名の署名がある。第一次越冬を引き揚げる時、荷物の荷重制限があつたが、その時もそれだけは荷物に入れて日本へ持つて帰つた。第三次越冬の時にも、その本は再び昭和基地の私の部屋にあつた。

もうそろそろ五十年にならうとしているから、今や、その本の内容とともに第一次越冬隊員の署名も貴重である。本はポロポロであるが、もう、本多氏はそんなことは忘れてしまつていると思つていた。

その後、加納一郎全集（教育社一九八六年刊）発刊の時、西堀さん、本多氏と共にその編集に携わつた。そして全集の中の『世界最悪の旅』の解説をした。その時、彼の本が自分の手元にあることを言おうとしてどうしても口に出なかつた。

それから何年もたつたある日、突然、東

京の本多氏から福岡へ電話がかかつてきた。『私のゼロックスコピーか何か君のところにあるんだつて？：』

明らかに何かの返還を要求している。その頃、丁度、彼から別のコピーを借りていた。しかし、それはすでに返還してあつた。東京からの電話に、咄嗟にその返還したコピーのことを思い、そんなのはすでに返したと返事した。話はそれで終わった。あとから考えてみると、そのコピーというのは、あの、学生時代に、私に渡した（貸した？）『世界最悪の旅』のことではなかつたか？ それにしても、その時から何十年も経っている。何故、突然返せと言つてきたのだろうか。そんな古い話をどこから聞き出して来たのだろうか。さまざまに思いが僕を駆けめぐつたが、僕の結論は、『返さないぞ：』であつた。僕はその後知らん顔をしていた。

何年か後、その中の『世界最悪の旅』が朝日文庫（一九九三年刊）で復刊された時にもその解説（前述）をした。最近の本多氏との接触の機会は、本多氏自身の著『本多勝一集全三〇巻』（一九九九朝日新聞社刊）の第二八巻の『アムンセンとスコット』の発刊の時である。その本の後半、『史上最大のレースを検証する―北村泰一氏との対談―』で本多氏と対談した。学生時代に本多氏からかりていた『世界最悪の旅』以後、何度も読んで心のために疑問を吐き出した。しかし、それらの時も、彼の本が自

分の手元にあることを黙っていた。

今、その本は目の前にある。現在、九大での講義でも使っている（『極地探検の歴史』という講義をやっている）。しかし、その本を見ているうちにやはり返さなくてはならないような気がしてきた。この中には僕の青春がいっぱい詰まっている。だが、彼の青春も詰まっているかも知れない。やはり返すべきだ。

という訳で、ここに告白する気になった次第である。紙面をかりてこんな話しは恐縮だが、彼がこれを読んで電話をかけてきたら、こんどこそ、返すつもりである。五年経ったが。

話を戻そう。

ある時、長谷川万吉先生にそっとカマをかけてみた。いろいろ南極の話で雰囲気



『世界最悪の旅』（チェリー・ガラ・ド著、加納一郎訳、昭和19年朋文堂発行初版本）表紙をめくったところ。本多勝一氏所蔵本だが、同氏から借用して、著者（北村）が第1次（1956～1958）、第3次越冬（1958～1961）に昭和基地にもちこみ、そのうちの第1次越冬隊全員の当時のサイン（1958年12月）

を盛り上げたのち、

『ところで、僕は南極へ行きたいのですか……』

長谷川先生から大賛成の激励を受けると思っていた。ところが、先生の口からは、『君は南極などへ行ったらいかん。東京へ行つて、永田君の下へ入つてはいかん。今は勉強する時だ……』

これは意外。勉強しなければならぬ時だなんて、そんなことわかっている。しかし、僕は行きたいんや。それに、そもそも、最初に僕に火をつけたのは、先生、あんたやないか……。

『どうしても行きたいんなら勝手にするがよい。その代わり破門する……』

破門とは古くさい言葉だと思った。しかし、後に新聞で僕を紹介する文には、『北村

氏は京大長谷川万吉教授の門下生である……』とあったので、破門という言葉も当時としては生きていたのかも知れない。丁度修士を卒業する時なので、大学院博士課程には入れてやらない、という意味であったのだ

ろう。

それを聞いた友人は異口同音に『やめとけ、やめとけ』と忠告する。先生に睨まれたら、そのあとはどうにもならん。万一、南極へ行けても（行けるなどとは想像もつかなかつた）そのあとどうする。大学に戻れないなら学位はとれない。就職も出来ない……。

父は何も言わなかつたが母は嘆いた。『就職が出来なかつたら、お嫁さんもくる人はいないだろうね。あんたは三条の橋の下しか住めないのねえ……』

当時、三条大橋の下には浮浪者が住みついていていた。三条の橋の下しか住めないというのは、大貧乏の代名詞であつた。私が工学部でなく理学部を受験したこと、ましてその中で地球物理学を志望したことにも反対だつた父母である。そんな道では食えないというのである。かねがね思っていたその不満の気持ちを一気にぶつつけたものだろう。私が九大に勤務して、何十年あとで母はいつた。

『あんたはうまく泳いで職にもありついたら、お嫁さんも貰えた。しかも、九大教授という公務員でもましな方になつたし……、あんたにはかみさんが（神様）ついてはるのや……』母は、決して僕の努力を認めてくれなかつた。

南極へ行こうと思つた時、思わぬ周囲の反対に散々悩んだが、やはりどうしても行きたい。南極は、アムンセンやスコットの

探検です。南極点とロス海地域は踏まれているが、日本の目指すプリンス・ハラルド海岸一帯は、バードのハイジャンプ作戦の時の航空写真だけで、人類が未だ地上を踏んだことはない。だから、全く未知である。わかつているものは何もない。『探検とは、知的情熱の肉体的表現である：』ではないか？肉体をはることなら僕で出来ない筈はない。『低くてもよい、その第一登頂者になれ：』ではないか。南極という大地域は探検されているが、プリンスハラルドは前人未踏の地ではないか。『主流（先生は）より、辛くても反主流（反対の多い南極へ）の道を：』ではないか。その頃は純真であった。教えに忠実であった。

やはりゆめきたい。博士論文がダメでも、お嫁さんが来なくても、三条の橋の下に寝てもよい。やはり行きたい：。そういう思いが日に日に強くなってきた。とうとう決心して、三月の末に長谷川先生にお別れを言いに行った。奨学金で買ったおおきな木箱のラジオ（当時のハイテク家電製品）とバイオリン一丁（当時は夢中になっていた）をぶら下げて、東京行きの夜行列車にのった。寝台車はあったが、そんなものには乗れない。勿論三等車（最低のクラス）であった。一晩かかって汽車は東京へ走った。一九五六年の四月である。前途は、期待と不安でいっぱいだった。

備考・破門する！といって怒った長谷川

万吉先生は、僕が南極から帰ってみると、ちゃんと大学院博士課程に入れておいてくれた。先生とは有り難いものである。（第一次に限り大学院学生の身分のまま南極へゆけた。以後は休学）。

北村泰一（南極第一次、第三次越冬隊、犬かかり、タロジロ発見者、九州大学名誉教授）

電話&ファクス／092-661-7309

電子メール／yiu20409@nifty.com

（次ぎは西堀さんの思い出）

（二二年九月九日受理）

会員情報（住所変更）

一澤信夫さんを悼む

平井 一正

一澤帆布工業会長の一澤信夫さんが三月

一日、八五歳で亡くなった。山岳部に入部した新人が最初に買うのが一澤製のキスリングであり、多かれ少なかれ長い間山岳部員は、一澤さんにお世話になった。永六輔の「職人」（岩波新書）にも紹介された根っからの職人で、その気質、博識と軽妙洒脱でウィットとユーモアに富んだ話術、権威を恐れない反骨精神などで、登山関係者のみならず、各種の専門職人をはじめ、芸術家、作家など、各層に多くの熱心なファンをもっていた。晩年には京都の顔として雑誌などでも紹介されていた。

一澤さんが京大山岳部と関係をもった経緯は三高時代にさかのぼる。戦後まもなく山口克らが好日山荘でキスリングを作らせたが、仕事が雑で気に入らなかった。そのとき土倉さんから一澤帆布店の存在をきいて、山口が同店を訪れたのがそもそものはじまりである。京都一中山岳部は昔から一澤さんと装備を作ってもらっていた。そういう関係で山口が土倉さん（一中OB）から一澤さんの名前を聞いたのである。山口が会ったのは、我々が知る一澤さんのお父さんであった。以後京大山岳部と一澤さんの密接な関係が始まる。

知恩院の斜め前、東大路に面した古ぼけた店のガラス戸を開けると、種々なバッグ類や作業服などが並んでいた。今と違って店はせまく奥からミシンの音がきこえてきた。ぼろぼろになったキスリングやオーバーシューズなどをたびたび修理に持ち込ん

だが、一澤さんはいやな顔も見せず、見違えるように丁寧に修繕してくれた。シンブル、丈夫、というのは、その頃からの Motto であつた。

一九五八年 AACK がチョゴリザ（七六五四メートル）に初登頂するとき、一澤さんに登山装備を作ってもらつた。企業から提供をうけた繊維製品を、こちらのデザインにあわせてテントやヤッケに加工してもらつた作業は、今考えると採算を度外視したものであつたと思う。当時開発されたばかりの化繊でテントを加工するときに、それまでと同じスピードでミシンをかけると、布地が丈夫なため、針が摩擦で加熱して糸が溶けるといふ問題が起つた。ミシンの回転数があげられない。時間に追われる中で、そういう問題を解決しながら装備を作つてくれたことに今更ながら感謝の念で一杯である。チョゴリザ頂上には、一澤製のラベルのついたヤッケ、防風ズボン、オーバースユーズなどが同伴した。ラベルは現在のものより小さい目で、ローマ字であつた。ヒマラヤの頂上をきわめるのは限られた人間だが、それを支持する裾野は広い。その一角に一澤さんがおられたことを忘れることは出来ない。京大だけでなく京都から出た多くの海外登山隊の活躍の陰には、一澤さんの暖かい援助があるのである。

最近では既製品が出回り、一澤さんに登山装備をお願いすることも少なくなつたが、バッグ類では全国的ブランドになり、大き

く発展してきた。店も見違えるように大きくなつた。その一端として、ニューヨークタイムスが八八年三月二七日付けで、「京都のキャンパスバッグはすべてのニーズにびつたり」というタイトルで、一澤製品が写真入りで大きく紹介されていた。これを語つたときの一澤さんのうれしそうな顔を忘れることができない。心からご冥福をお祈りする。

理事会（三月一八日開催）報告

事務局 吹田啓一郎

去る三月一八日に定例の理事会が開催されました。簡略ながらご報告いたします。この理事会で決議されまし平成一三年度の事業計画については来る五月二〇日に開催予定の総会にてご報告いたします。総会の正式なご案内は別にお知らせいたします。

一日時 平成一三年三月一八日（日）

午後一時～午後三時

二 場所 京都市左京区田中関田町

京大会館一〇三号室

三 出席理事

上尾庄一郎、田中二郎、岩瀬時郎、新井

浩、原田道雄、西山孝、牛田一成、吹田

啓一郎、山田和人、竹田晋也 以上十名

委任状によるもの 松林公蔵、清水浩

以上二名

欠席理事 上田豊、横山宏太郎、松沢哲郎 以上三名

四 議事の経過および結果

会長上尾庄一郎が議長となり、「本日の出席者は定款第二十一条第一項に示す定足数に達しているので正式に議事に入る」旨発言があり議事に入った。

第一号議案 平成十三年度事業計画について

理事吹田啓一郎によって作成された平成十三年度事業計画に付いて逐一審議の結果、満場一致でこれを承認した。

第二号議案 平成十三年度収支予算について

理事竹田晋也によって作成された平成十三年度収支予算に付いて逐一審議の結果、満場一致でこれを承認した。

第三号議案 新入会員について

担当者より下記一名の本会入会申請者の紹介があり、満場一致で承認した。

有馬 賢治（一九七四年農学部卒）

第四号議案 今西錦司生誕百年記念シンポジウムについて

理事松林公蔵より、書面にて「今西錦司生誕百年記念シンポジウム」の運営に協力する件について提案があり、逐一審議の結果、満場一致でこれを承認した。

第五号議案 AACK 映像史の編集について

会員平井一正より、本会創立七十周年記念事業として、創立以来の学術登山および探検調査による映像記録の整理と記念

関係団体行事カレンダー（2001年）

日 時	名 称	付 記
5月12日、13日	探検部OB集会	笹ヶ峰ヒュッテ
5月20日	理事会、於京大会館	議題は2000年度事業報告と決算、役員改選
5月20日	AACK総会、於京大会館	2000年度事業報告と決算、2001年度事業計画と予算、役員改選
8月3日～5日	笹ヶ峰会総会・親睦会	総会は4日、第1年度の決算・報告を含め案内の文書を春に発送予定です。
8月5日～19日	笹ヶ峰ヒュッテ・夏の開放期間	受付開始6月1日
10月6日	今西錦司生誕百周年記念シンポジウム	主催京大総合博物館、一般参加歓迎
10月7日	探検部OB会総会	於京大総合博物館
10月6日～14日	笹ヶ峰ヒュッテ・秋の開放期間	受付開始9月1日

編集記

映像史を編集する件について提案があり、逐一審議の結果、満場一致でこれを承認した。

以上

このニュースレターの編集作業をお引き受けしたのは二年前のことでした。「任期は二年」と正式なものではありませんが約束していました。本号を含め、あと二号の編集で私の任務は完了します。今秋発行予定の二二号からは、北村泰一氏が編集してください予定です。

私の不都合や突然のカナダ出張などで、本号の発行が遅れてしまったことを深くお詫び申し上げます（何時ものことを深くです）。高齢化とは処理能力の低速化のようです。記憶力が落ちると作業能力も低下します。パソコンではメモリーの量を大きくすると処理速度が向上するようです。別の次元のこととはいえ私には理解しやすい現象です。

一澤帆布店のご主人、「一澤のおっさん」がなくなられました。一澤帆布店と京大山岳部との長いご縁について、最近藤平先輩から当時の事情をお聞きする機会がありました。

戦後間もない昭和二二年の年末に東山道りを歩いていた藤平さんが、ショウウイン

ドウにキスリングを飾ってあるお店を見つけ、早速飛び込んだのが一澤帆布店であったそうです。その後一澤帆布店でサブザックを作ってもらったのだが、林一彦氏のアパートが火事となり、その時にサブザックは焼失してしまったとのことでした。林さんのアパートの部屋は二階にあり、敏捷な林さんは窓から松の木に飛び移り難を逃れた。またこの火事で、林さんに貸してあった仙台山之内製で二四号の銘のあるピッケルも焼失し、藤平さんは取り返しの着かない損失を被られたとのこと。

なお藤平さんは、足の治療のために金沢大学医学部付属病院整形外科にしばらく入院されるそうです。同氏への連絡はファクス 0764334553をご利用下さい。

本号には藤平先輩の随想を付録として追加しました。次号は山岳部創世特集とし、当時在籍された先輩の方々からの記事を掲載する予定です。当時のことについての原稿をお待ちしています。

沖津文雄

編集委員 沖津文雄、吹田啓一郎、竹田晋也

発行日 二〇〇一年五月十日

発行所 京都大学学士山岳会

京都市左京区吉田本町

京都大学工学部建築系

吹田啓一郎 気付

製 作 京都市北区小山西花池町一―八

(株)土倉事務所